

# 子育て支援「ぷちとまと」における保育学生の学び

Learning of Childhood Education Students in Child-Rearing Support Center "Puchi-Tomato"

青木 弥生

AOKI, Yayoi

キーワード：子育て支援、学生の学び、保護者の理解

## I はじめに

「子育て支援」は、わが国において少子化が課題とみなされるようになった昭和の終わりから平成の初め頃から取り組みが開始され、平成から令和に入った現在においては一般に浸透した用語となっている。社会における「子育て支援」の重要性が認識されることにともない、子育て支援において保育や保育者がその専門性を発揮することが期待されるようになっており、実際に地域子育て支援の現場において保育士・幼稚園教諭の有資格者がその担い手となる場合が多いことが確認されている（大谷・中山・瀬渡，2005）。

保育所保育指針、幼稚園教育要領、こども園教育保育要領のいずれにおいても子育て支援への言及は改訂のたびに詳細となり、これにともなって特に保育士資格カリキュラムにおける子育て支援に関する内容は充実度を増している。本学においても保育士資格の必修科目の「相談援助」、「家庭支援論」、「子育て支援論」、「保育相談支援」に加え、選択科目として「子育て支援カウンセリング」、「子育て支援フィールドワーク（基礎／応用）」が開講され、子育て支援の担い手としての資質や専門性を向上できるようにカリキュラムが組まれている。

福井ら(2008)は、保育者養成系の短期大学を対象に、学生が主体的・体験的に子育て支援を学ぶ実践の内容やねらい、養成課程におけるカリキュラム上の位置づけを調査・検討している<sup>①</sup>。その結果、調査対象となった半数以上の養成校において学生が実践に参加する形態の子育て支援が行われ、学生の学びの場として機能していること、支援の形態の大半が保護者と子どもを対象としたものであることが確認されている。このような現状を踏まえ福井らは、子育て支援を学生自身が実践することに

より、支援に必要な基本的な資質・姿勢・態度や支援の基盤となる「保育力」について学ぶことが期待される一方、「子育て支援」を実践する力の向上については難しい状況であると考察している。

また、實川・砂川（2017）は、保育者養成課程の大学生が地域子育て支援実習で感じる困難感について検討している。地域子育て支援の現場での実習の中で、学生は支援者として必要な専門的援助に気づき具体的な支援を実践する機会を持つことができるものの、実際の子育てに対する知識や経験を十分に持って実習に臨んでいないことに困難感を感じていることが明らかになっている。加えて、学生の保護者の理解が「助けられるべき・支えられるべき」被支援者としての側面に集中していることを實川らは述べており、学生の子育て支援の学びの中でも、保護者の理解について課題があることがうかがわれた。

これらの先行研究から、養成校における子育て支援に学生が参加し、実践を通して学ぶことにはある一定の意味があるものの、学生の子育て支援を実践する力、支援の対象である「保護者」や「子育て」についての知識が十分でないことを踏まえて行われなければならないものと理解できる。つまり、子育て支援は「保育」そのものではなく、育てられる立場としての子ども、育てる立場の保護者の双方を視野に入れて行うべき保育とは別の実践であり、「子育て」についての十分な知識や理解を持つことが、実践を通して支援のスキルを身に着けるために欠かせないものと考えることができる。

この問題意識を基底として、本報告では保育者養成課程3～4年次のゼミ（「専門研究ゼミⅠ／Ⅱ」）における子育て支援の実践について報告し、実践を通してゼミ生が「子育て」や「保護者」についてどのように理解し、学んでいたかについて考察していくこととする。

## II 「専門研究ゼミ」の概要

本報告では、筆者が2018年度に担当した「専門研究ゼミ I」における子育て支援の実践と学生の学びについて報告する。

専門研究ゼミは I が 3 年次、II が 4 年次に配当され、一人の教員の指導のもとゼミ形式で特定の領域について学びを深め、卒業時まで卒業論文（制作や発表の場合もある）をまとめていくことを目指すゼミナール形式の授業である。学生は 2 年連続で同じ教員の担当するゼミを履修することになっている。2018 年度のゼミ生は 4 名で、すべて女子学生であった。

筆者の専門研究ゼミでは子育て・保護者・家庭をテーマとし、テーマについて保育者としての職務に必要な知識や態度・技能を身に付け、各ゼミ生が関心領域を絞って卒業論文執筆に結びつけていくことを目標として指導を行った。この「子育て・保護者・家庭」というテーマは、保育者として子育て支援や保育を実践していく上で欠かせないものでありながら、大学でのカリキュラムの中で体系的に知見を深めたり、保育所・幼稚園などの外部実習において実際に接触して支援を体験したりすることは難しい（福井ら，2008）というジレンマの中にあるとされている。保育者としての座学や実習の学びを進めながら卒業後の進路を考えていく 3～4 年次にこのテーマについて学びを深めていくことは、学生の実習や座学における学びと相互作用を期待できるものと考えられる。

## III 子育て支援「ぶちとまと」とゼミ活動

### 1. 子育て支援「ぶちとまと」について

本学では、2014 年に地域子育て支援および学生の教育の機会を提供することを目的とした「みんなで遊ぼう会」が開かれるようになった。2016 年に年に数回の開催であった「みんなで遊ぼう会」は地域の子育て拠点となることを目指して定期開催される「ぶちとまと」として発展的に継承され、学部の事業として専任教員とその教員が指導する学生が中心となり、支援の環境が整備された上で運営されるようになった。

2018 年 4 月からは大学のこども教育研究センターが運営統括となり、筆者はこども教育研究センター員として「ぶちとまと」を担当する立場となった。この機会に「ぶちとまと」の運営の在り方および支援施設や環境が再度見直され、再整備が行われた。常駐の保育者が補助の学生数名とともに支援に当たる体制に変更され、長期休み期間以外月 2 回木曜日の開室として常設の支援施設としての性格を強化されることになった。

ぶちとまとを利用する子どもは年間を平均して 1 歳児がもっとも多く、0 歳児と 2 歳児が続いており、3 歳以上の利用は非常に少ない（青木・今井，2019/2020）。利用者の年齢の特徴は、開室時間や比較的小ぢんまりとした施設の特徴から利用者（子どもの保護者）に選択された結果であるとともに、運営側で利用者の実態に合わせて玩具や遊具などを選択し、環境調整を行った結果でもあると考えられる。

### 2. 専門研究ゼミによる支援の計画と実践

#### a. 身体計測の導入について

筆者が指導する専門研究ゼミは「ぶちとまと」の運営が改まったのと時期を同じくしてのスタートということになり、年度当初から「ぶちとまと」での活動を通してゼミでの学びを進めていくことを計画していた。常駐保育者と補助学生が置かれているため、ゼミの活動として支援の場の運営そのものを請け負うことはないが、安定的に支援の場を運営するスタッフがいることで、ゼミの計画に専念し活動可能な状況であった。これらのことから筆者は、大西・高松（2018）の実践を参考にゼミ学生が「ぶちとまと」の施設内で定期的に身体計測を行うこととした。ゼミ学生が身体計測を計画・実施することで、子育て支援の実践を主体的に経験し、身体計測の活動を起点としてゼミの学びの目標である「子育て・保護者・家庭」への理解も深める指導につないでいくことを目標とした。

大西・高松は大学内の子育て支援拠点活動における身体計測の活動を報告し、身体計測を行うようになったきっかけが保護者からの要望があったことにあるとしている。乳児の身長や体重は出生時の健康状態の重要な目安であり、法定検診においても基本のチェック項目となっている。母子手帳には乳幼児身体発育曲線（いわゆる成長曲線）が掲載され、月齢ごとに身長体重の記載欄もある。保護者にとって身長や体重という具体的に数値として把握できる発達の様相は、子どもの発達を実感する方法と重視されており、子育て支援の中で計測の環境を提供する一定のニーズがあると考えられる。

また、「ぶちとまと」に常駐の保育者を置き、開催日時を増やして常設の地域の子育て支援拠点としての体制を強化したことから、ゼミによる活動を「ぶちとまと」での支援とは一線を画して特別なイベントの行うのではなく、「ぶちとまと」の日常性の延長線上にある活動を行うことが望ましいと筆者は考えた。身体計測を「ぶちとまと」の実践と連続性を持たせて行うことで、保護者と支援者の間で子どもの成長を共有し、コミュニケーションのきっかけを行うことは、「ぶちとまと」の支援の性格を強化する面からみても適当であると判断した。

## b. 身体計測の実践とその意味づけ

身体計測は月2回の開室日のうちの1日に実施され、原則として月の後半の開室日を計測日とした。1回の計測について4名のゼミ生のうち2名が実施者として「ぶちとまと」に常駐し、保護者の希望に応じて計測を実施した。計測日の事前の告知は行わず、実施日は常駐の保育者から入室の際その旨を伝え、室内の掲示でも告知した。ゼミ生は身体計測の実践が終了したあと、原則1週間以内に振り返りのレポートを提出し、ゼミ内でもレポートをもとに「ぶちとまと」での経験を共有し、振り返るようにした。

計測のため利用したのは立位用の身長計と臥位用の身長計と体重計で、胸囲や頭囲の測定の要望があった場合に備えてメジャーも準備した。これらの機器は「ぶちとまと」のいくつかの遊びのコーナーに隣接する形で室内の一角に設置したため、利用者は施設に入室すれば声掛けがなくてもその日が計測の実施日であることがわかるようになっていた。

「ぶちとまと」で行う身体計測は、身体計測と「ぶちとまと」の支援との連続性を持たせるため着衣のままで行うことにした。通常、発達状態のチェックを目的とした検診や病院での身体計測においてはできるだけ全裸に近い形で計測が行われるが、測定結果の精密性よりも支援の場として自然な形になるための判断であった。

支援との連続性の中で計測を実施することは、計測の手順においても原則とされた。「ぶちとまと」内で身体計測を実施していると知った保護者の大半は計測を希望するが、保護者の意図を最優先に希望があればただちに計測を行うことはせず、子どもが室内で十分に遊べるようになる状態まで見守り、見慣れぬ身体計測機器の存在に慣れたところで遊びの切れ目を狙ったり、遊びとつないだりしながら、子どもの気持ちをしできるだけ計測に向けた上で保護者の協力を得て共同で計測を実施するよう

に心がけた(写真1)。

## c. 身体計測結果の記録と記録の持つ意味

身体計測の測定結果は、何らかの形で保護者にフィードバックする必要があることを踏まえ、ゼミ内でその方法を検討した。ゼミの中で母子手帳に細やかに体重を記録する欄があること、出生体重や身長は出産のお知らせなどに書かれたり、足形や手形が装飾品として加工されたものに書き添えられる場合もあること、結婚式の記念の贈り物として両親に出生体重と同じ重さのぬいぐるみが送られている例などを話し合い、身長体重が保護者にとっては単なる測定値ではなく、子どもの成長の目安や成長の証となっていることについて理解を深めた上で、結果のフィードバック方法を検討した。

ゼミの中での議論として、たとえ1回限りの測定であっても記録は視覚的にしっかりと確認できる形に残して伝えること、毎月計測を行うということによって成長を連続的に俯瞰して実感できるような形で知らせることが必要だろうと意見がまとまった。

これらの検討の結果、季節ごとの絵柄のカードを作成して時期に合った絵柄のカードに測定結果を記録して保護者に渡すこととし、カードには穴を空けてリボンを通して壁などに飾れる形にすること、穴を空けることでカードが何枚かたまったものをひとまとめの冊子としてまとめることができ、連続的に成長を確認できるような形態とすることになった(写真2)。

また、ゼミ活動として2018年度10月に行われた学園祭(宝仙祭)において「てがたスタンプあそび」という親子向けの出展を行った。この出展は、身体計測の記録用紙と同じ大きさで同じ場所に穴をあけたカードに子どもの手形を押し、乾いた手形を動物に見立てて目やパーツなどを書き込んだカード(写真3)を作るという活動を親子で行なうものであった。すでに「ぶちとまと」での身体計測を経験している利用者に対しては、この催して



写真1



写真2



写真3

作成したカードが身体計測で渡している記録カードの表紙として利用できると説明した。学園祭初日の5時間ほどの出展に参加した30組以上の親子のうち数組が「ぶちとまと」で身体計測の経験がある親子であったほか、「ぶちとまと」利用者のボリュームゾーンである0歳～3歳未満の子どもの保護者に対しては「ぶちとまと」や身体計測の活動の告知も行った。

#### IV 「ぶちとまと」での活動を通じた気づきと学び

「ぶちとまと」での活動を通じた学生の気づきと学びについて、実践後の学生の振り返りレポートの記述から考察する<sup>(2)</sup>。

身体計測は、着衣で日常性をできるだけ尊重した形とはいえ、計測がスムーズに進むことは少なく、[身長計が嫌だと泣き出す]、[(測定のために) 母親から離れた瞬間大泣きして抱っこを(母親に) 求めていた] など、学生が子どものネガティブな反応に出会ったという振り返りが多く認められた。これは大学内の子育て支援拠点活動の中で身体計測の活動を報告した大西ら(2018)、大西(2019)の実践においても同様の報告がある。一方で[何もわからないのかキョトンとしている]、[友達が計測しているのを見て(測定用具に) 乗る姿が見られた] など、子どもが身体計測に対してネガティブな反応を見せず、スムーズに進んだケースについてその要因を考察している記述も認められた。

保護者については[子どもが嫌がっていてもできるなら計測してほしい(と思っているようだ)]、[(測定時泣いている子どもに) 「ごめんね」と言いながら子どもの成長を知りたい(ようである)] など、身体計測に対するネガティブな子どもの反応があったとしても測定することに意味を見出し、何とか計測しようとする保護者の

思いを押し量っていた。また、保護者が[子どもの成長に関して不安を(保護者は) 沢山持っている]、[子供の成長は適切か]、[ほかの子ども(同じ月齢)と比べて成長が遅いのか] などについて関心や不安を持っているということについても振り返っていた。さらに、このような思いを持った保護者たちが[同じ場に集まっているママ友と情報を共有しながら共感し、解決し合っている]、[それぞれちがう子育てのことや子どもの好きなものなど話している様子が見られ(中略)自分だけではないという部分も支援なのかと思った] などのように、「ぶちとまと」の場がその思いを表現し共有する場となっていることに思い至っていた。

保育学生が子育て支援施設を利用する保護者について「助ける必要がある」、「支えないといけない」などのように被支援者の立場で学生が理解しがちである(實川・砂川, 2017) という傾向はゼミでの議論の中でもしばしばうかがわれた。しかし、学生たちの記述からは「ぶちとまと」での経験を通じて、その理解に沿わない保護者の姿に直面し、新たな保護者の姿に出会っていることがうかがわれる。

さらに、[緊張して(保護者に) 話しかけられません]、[保護者にもいろいろ子育て事情を聞いてみたいが、聴いていいのか悪いのか決めあぐねている] など、地域子育て支援の現場において学生自身が支援者としての在り方に対する戸惑いも振り返られている。身体計測やそれに関する保護者の心配や不安が保護者同士のかかわりの中で解決される様子に気づくということは、支援者に対して保護者を助けたり支えたりする役割が必ずしも求められているわけではなく、助けたり支えたりとは別の支援の必要性を感じ、それを模索する姿としてあらわれていると考えられる。

このような戸惑いの中、[おもちゃや動線を作って(計測の場)に行くまでを楽しんで] (写真4)、[遠巻きに



写真4

子どもを見守り、時折子どもと、その保護者と話すようにする]など、「ぶちとまと」の中での支援の方策や在り方を見出そうとする学生の振り返りも認められた。子育て支援の場で身体計測を行うという文脈の中で支援者として必要とされることはどのようなことなのか、改めて自らに問い直し、実践につないでいこうとする姿勢が学生たちの中に生まれたと考えられる。

## V まとめ

子育て支援の現場での実習に臨んだ学生は、支援のためのスキルや知識が十分でなかったとしても、他の支援者の姿から学び、自ら実践することを通してやがて保護者を共感的に理解し、アプローチするようになっていくと考えられている(實川・砂川, 2017)。この指摘の通り、保護者を「共感的に理解し、アプローチする」ことに向けては、ほかの支援者の姿から学び実践する経験を重ねることに加え、保護者についての基本的な理解が欠かせない。保護者に対する基本的な理解とは、保護者を「助けられる／支えられる」ことを必要とする存在であるという枠組みから離れ、保護者の子育てという営みが具体的にどのようなものであり、子育ての営みの中で何に心を向け、関心を持っているのか、という思いを受け止めることといえよう。

今後も、「ぶちとまと」での学生の実践とその理解の深化の分析を通して、保育者として求められる「子育て・保護者・家庭」の理解とその学びについて検討し、保護者に「共感的に理解し、アプローチする」ために必要な視点やスキルについて検討していく予定である。

### 文献

- 青木弥生・今井景子(2020) 地域における幼児教育・保育の振興 「ぶちとまと」実践報告 こども教育研究センター 2018年度活動報告書(2) こども教育宝仙大学 3-10.
- 青木弥生・今井景子(2019) 地域における幼児教育・保育の振興 「ぶちとまと」実践報告 こども教育研究センター 2018年度活動報告書(1) こども教育宝仙大学 3-10.
- 福井逸子・小栗正裕・瀧川光治(2008) 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究(1)短期大学へのアンケート調査の分析を通して 北陸学院大学・北陸学院短期大学研究紀要(1), 135-150.
- 實川慎子・砂上史子(2017) 保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難感:学生の保護者理解と保護者へのかかわりに注目して 千葉大学教育学部研究紀要 65, 327-334, 2017-03.
- 大西薫(2019) 身体計測の観察から学生は何を学ぶのか—地域子育て支援センターくれまちすにおける活動から— 岐

阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要, 18, 95-102.

大西薫・高松みゆき(2018) 地域子育て支援センター「くれまちす」における身体計測の実践 岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要, 17, 165-170.

大谷由紀子・中山徹・瀬渡章子 2005 全国の自治体における地域子育て支援センター事業の設置運営体制 日本家政学会誌 56(9), 661-672.

### 註

- (1) 福井らは検討を短期大学に絞った理由として、4年生大学における保育者養成の多くが保育者以外(社会福祉士国家試験受験資格やその他心理系の資格など)の取得を並行して行うカリキュラムが組まれている場合が多く、子育て支援の実践を保育者養成のカリキュラムと直線的に結び付けて検討することが困難となるためと説明している。
- (2) 以下、学生のレポートでの記述を[ ]でくくり、ゴシック体で表記している。記述内の( )の部分は記述の理解上必要な補足で、筆者によるものである。

